

I

ジパングの系譜

0 はじめに

どこでだったか、東西文化交流を論じた本の中で、「日本が西洋に及ぼした影響のうち最大なるものは、マルコ・ポーロが黄金島ジパング¹⁾の話を変え、ヨーロッパ近代序曲の契機をなしたことにある」といった意味の文を読んだことがある。こうした発言の底には、十四世紀モンゴル帝国の崩壊以降、東西関係は西洋からの東洋への積極的進出と前者に対する後者の受身的抵抗という形をとり、いわゆる「大航海時代」や植民地主義・帝国主義の時代をへて、最終的には近代ヨーロッパによる世界制覇に至るといふ、西力・西風の東漸史観、進んだ西洋と遅れた東洋という単純で公式的な近代史の図式と西欧中心主義的な世界観があることはいうまでもあるまい。その西力東漸のきっかけをなしたのが、他ならぬマルコ・ポーロ伝えるところの「黄金のジパング島」伝説であり、世界史におけるその象徴的な意義の大きさに較べれば、後の日本に対するヨーロッパの圧倒的な影響に対して、ヨーロッパへの日本の影響といったものは直接的にはほとんどないに等しい、あるいは取るに足りぬほどだといふのであろう。

はたして歴史上の影響の因果関係の決定やその大きさの測定が可能か否かはともかく、近世以降の東西関係が一般にこのような西力・西風の東漸という形で特徴づけられること、しかしそうした捉え方が西洋を中心とする西洋の側からみた一方的な世界史であることは夙に指摘されるところである。

マルコ・ポーロの『東方見聞録』が、少なくとも文献としては西洋世界に日本の存在を伝えた最初のものであること²⁾、またそれがアメリカを「発見」することになるコロンブスの航海の一つの大きな動機をなしていたこと³⁾、は事実である。そして、これらの事実のその事実としての重みにおいて、マルコ・ポーロは、それ以後の世界がたどった歴史、とりわけ東西文明の交流を考える際に、前述のような西力東漸の文脈において、すなわちアジアの「発見」と後のヨーロッパの膨張・発展の、ひいてはヨーロッパ近代の偉大と栄光の、象徴的な先達として引き合いに出され意味づけられるのが常である。

例えば、イギリスの外交官であり東西文化交渉史の研究者であったサンソムは、

ヨーロッパのアジア進出が十六・七世紀のヨーロッパ思想に及ぼした影響を考察する中で次のように述べる：

コロンブスや他の冒険家たちを駆って発見航海を行なわせ、このようにして東アジアに国際競争の種子をまき、ヨーロッパ王権国家間の対立・和解という問題を新しい、緊急な形で提起させたのは（部分的には少なくとも）、マルコ・ポーロが寓話的に語り伝えたジパング、すなわち日本を実際に探し求める試みであったという事実には、一種の皮肉がある。⁴⁾

ここで、東アジアにまかれた「国際競争の種子」とは、大航海時代以降の、最初はポルトガルとスペインの、後にはオランダ・イギリス・フランスをも巻き込んだ航海・貿易上の抗争、植民地争奪、ならびに布教上の紛争を指し、新しい緊急な「問題」とは、そうした抗争・紛争や、「発見」された「新大陸」での征服者たちの蛮行が、ヨーロッパ諸国間の対立を調停・和解させ相互の関係を秩序づける法律の必要性を認識させ、グロチウスの『戦争と平和の法』（1625年）にみられるような国際法を発想させるに至った、という事情を指す。そして、これら一連の出来事や思想的発展のきっかけとなったのが、遠くマルコ・ポーロ語るところのジパング島の寓話、すなわち非ヨーロッパ世界の一島国の、しかもその幻想であった点に歴史展開の思いがけなさ、歴史の「皮肉」が感じられる、というのであろう。

しかし、はたしてそれは「皮肉」であろうか。すべてが西洋近代へと流れ込むという歴史展開の論理的必然性を信じさせたがる後のヨーロッパ人にとっては「皮肉」であっても、所詮は歴史の中に無数にみられる一つのエピソードなのではなかろうか。また、当時の東西関係はまさしくそうした「幻想」や偶然をバネに展開していたのではなかったか。

もちろん、これは多分に修辭的・象徴的な言い方であろうし、たとえそれら一連の出来事が事実であっても、そこから直ちにヨーロッパの圧倒的なアジア進出が始まり、アジアはあらゆる点でヨーロッパの影響を蒙るに至ると結論づけられるわけではない。事実は逆であったろう。ヨーロッパは貧しいが故に富めるアジアに進出し交易し掠奪し征服することを必要としたのであって、その逆ではないからである。つまり、西風も西力に乗って東漸したのではあったが、しかしだからといってよく東風を圧したわけではなかった。

事実サンソム自身も、これらアジアを舞台とするヨーロッパ各国間の争いは、結果としてはアジア諸国の反発・抵抗・自閉を呼び、布教にいたっては何らみるべき成果をあげえなかったことから、「アジアの思想が西欧の影響により乱され

ることがほとんどなかった」のに対して、先に述べた国際法の必要性の認識にみられるごとく、「アジアにおけるさまざまな出来事は、ヨーロッパの知的生活に新しい運動を起こさせた」⁵⁾ことを認めている。

「影響」といったあいまいな概念を用いざるをえないこと自体が問題なのであろうが、偶然的な接触や部分的・断続的な交渉はあっても、継続的な外交や全面的な交流はなかった中世から近世にかけての東西関係は、直接的であれ間接的であれ全体的な影響が云々されうる段階ではなかった。だからこそ、「マルコ・ポーロをつうじてのヨーロッパに対する日本の象徴的影響」といった後世からの言い方が可能となるのであろうし、また影響の相互性についても、相互に閉鎖的・孤立的な社会を構えていた当時においては、働きかけられる側よりも働きかける側の方が、その働きかけるといふ行為においてより多くの影響を、したがってまた力を、得たのではなかろうか。「影響」というのは、その言葉の本来的な意味において、それが強制でないかぎり、主体的には自ら選び取る行為であるはずだからである。そこにこそまた、近代西欧の興隆と発展の、したがって後の東洋の衰退と隷属の、原因の一つがあったのではなかったか。

サンソムも、ヨーロッパとアジアの関係全体をつうじてみて、前者の后者への進出が始まる大航海時代以来、十六・七・八世紀をつうじよてヨーロッパ人の植民活動・貿易活動はもちろん布教事業さえも、アジア諸国民の生活に「何ら顕著な変化をもたらさなかった。……その土地固有の文化の上にほとんど影響を及ぼさなかった。……実際、ヨーロッパがアジアに影響を及ぼすどころではなく、むしろアジアの財貨がヨーロッパ人の生活を変化させ豊富にしたのであり、またアジアの思想がヨーロッパ人の心を惹きつけることもあったのである」⁶⁾と結んでいる。

では、たとえすれ違いであれ、その東西の出会いにおいて西にとって東は何であったのか、西は東にいかなる目的とイメージをもって近づき、いかなる財貨と認識を持ち帰ったのか。狭く日本の場合に限れば、マルコ・ポーロによる紹介から始まって、十六世紀中頃のポルトガル人漂着による直接的接触の開始以来、キリシタンバテレンの渡来、江戸時代鎖国下長崎を通じたの交易、幕末から明治の文明開化、そして二度の大戦をへて現代に至るまで、西欧にとって日本はいかなる象徴であったか。また西欧社会・文化の展開の過程においてそのイメージと位置付はいかに変化してきたか。

さらにそれにともなって、日本に言及されるとき、西欧への最初の紹介者としてことあるごとに引き合いに出され、あたかも歴史の展開を決定づけたかのごとき名誉を与えられるマルコ・ポーロとその書『東方見聞録』は、いかなる運命をたどったか。

彼は、文字どおりユーラシア大陸を最初に横断した者でも、その記録を書き残した唯一の人間でもなかった。またジパングの記述は、周知のごとく、伝聞にもとづく不正確な情報を並べた寓話のようなものだった。にもかかわらず、かの書が他の数多の東方旅行・紹介記にまさって名高く、その後数百年にわたって西洋における東洋のイメージを決定づけたと言われ⁷⁾、また同書の、今なお中世アジアの地理と歴史の貴重な文献としてその科学性・信憑性が実証されつつある中央アジアの部分や、カタイやマンジの名で語られる元朝中国の詳細きわまる記述によってよりも、このジパング島の寓話によってよく知られるのは何故か。つまり、我々日本人にとって、ヨーロッパは現実のヨーロッパであるよりは今なお西洋というイメージであるごとく、ヨーロッパ人にとっても、日本は現実の日本であるよりは今なおジパングなのではないか。では、マルコ・ポーロとその書、そしてジパング伝説はいかなる形で作り上げられ、またその後の歴史の中でいかに受け継がれてきたか。⁸⁾

これらを全体にわたって論ずるのは、もとより筆者の力の及ぶところではない。この小論は、以上のような展望のもとに、まずそのそもそもの発端をなす『東方見聞録』の中で日本はいかに言及されているか、それは同書全体の枠組の中でいかに位置付けられるか、また当時の社会的・文化的文脈の中でいかなる意味を担っているか、さらにはそれが後世の日本への言及に対していかなる役割をはたしてきたかを、「ジパングの系譜」として若干たどってみんとするものにすぎない。

ところで、マルコ・ポーロについて考えるとき、もし彼が当時実際に日本にやって来ていたなら日本をどのように書いたか、(したがって「黄金島ジパング」の寓話をもたぬ歴史はいかに違ったものとなりえたか、それともなりえなかったか)、あるいはまた、彼が今の日本にやって来たならどう書くだらうか、という空想は一度は誰しもの頭に浮かぶことであろう。そうした着想や設定のもとに書かれたもの、あるいは「新・東方見聞録」といったパロディーも実際多く存在する。⁹⁾

数百年後の二十世紀も末、1980年代の日本にやって来たマルコに自らを擬したイタリアの現代作家ゴッフレード・パリーゼの日本印象記『雅冷やか』¹⁰⁾もまさしくそうした設定をとった本の一つである。七百年を一気にとんで十三世紀の昔に遡るまえに、マルコの系譜の最末端に位置するその本の中で、現代の日本が今の一ヨーロッパ人、彼も同郷のヴェネツィア人であるが、によっていかに描かれ捉えられているかを一瞥し、文化にとっての「自」と「他」、とりわけ自文化にとって「異なるもの」の構図、つまり他文化「異化」の様式と構造について考えておきたい。

- 1) 「ジパング」の読み、および「東方見聞録」の題については後にふれるが、とりあらず通称に従っておく。
- 2) 少なくともそれ以前の文献はまだ発見されていない。
- 3) 『コロンブス航海誌』林屋永吉訳、岩波文庫、1977；ラスカサス『インディアス史』長南実訳、増田義郎注、3巻、岩波書店、1981-7、等参照。
- 4) George B. Sansom, *The Western World and Japan: a Study in the Interaction of European and Asiatic Cultures*, (Rep. of 1950), Tokyo Tuttle, 1977, p. 110; G. B. サンソム『西欧世界と日本』金井園他訳、筑摩書房、1987、上巻 p. 141（引用は同書から、以下同）。
- 5) Ibid., p. 113; 同訳書 上巻 p. 145.
- 6) Ibid., pp. V- VI; 同訳書 上巻 pp. 2-3.
- 7) 例えば、「諸々の夢想や伝説、詩人や語り手たちの紋切形の空想の彼方なるオリエントの真のイメージは、ヨーロッパ人の頭の中では何世紀にもわたって本質的に『百万』[『東方見聞録』]の中に求められてきたと言ってよい」 Sergio Solmi, 'Introduzione', *Il Libro di Marco Polo*, a cura di Daniele Ponchiroli, Torino, Einaudi, 1892, p. vii.
- 8) 一般的にヨーロッパでは、西洋近代の地理的知識の拡大の先駆者としてのマルコ像、および『東方見聞録』の記述の科学性・近代性が強調される（cf. Luigi Foscolo Benedetto, 'Grandezza di Marco Polo', *Uomini e tempi*, Milano-Napoli, 1953, pp. 71-85; Leonardo Olschki, *L'Asia di Marco Polo*, Firenze, Sansoni, 1957; Giuseppe Bianchi, 'Marco Polo', *Letteratura italiana. I Minori*, Milano, 1961, vol. I, pp. 185-199）、のに対して、日本では東西を結んだ最初の人物という点が強調される（cf. 岩村忍『マルコ・ポーロ — 西洋と東洋を結んだ最初の人—』岩波新書、1951; 佐口透『マルコ・ポーロ — 東西世界を結んだ不滅の旅行家』清水書院、1977等）。いずれの場合にせよこうした捉え方は、時代が近代からポスト・モダンへと向かって新たな展開を見せている今、再検討されなければならないのではなかろうか。
- 9) その最もユニークなものとして、Italo Calvino, *Le città invisibili*, Torino, Einaudi, 1972; イタロ・カルヴィーノ『マルコ・ポーロの见えない都市』米川良夫訳、河出書房新社、1977、がある。クビライの使臣マルコが旅で見聞した（空想の）都市について大汗に物語る、という構成をとった空想小説。カルヴィーノ（1923-85）にも日本旅行記があり、「パロマーさんの日本印象記」と題して、*Corriere della Sera* に1976年12月以来4回にわたって連載された（日本旅行は同年11月）。この旅行記は、後にエッセー集 *Collezione di sabbia*, Milano Garzanti 1984; 『砂のコレクション』協功訳、松籟社1987に、「砂の形 — 日本—」として収録されている。
- 10) Goffredo Parise, *L'eleganza è frigida*, Milano, Mondadori, 1982. *Corriere della*

Sera 紙に 1981 年 1 月 25 日から二十回にわたって連載された日本旅行記を本にまとめたもの。同書の題は斎藤緑雨からとあるが出典は明記されていず、直接それに該当すると思われる文は確認できなかった。同書見開きには毛筆で書いた「優美は冷酷です」との日本語訳が掲げられているが、しかし<frigida>は性格的に<冷酷>というより、感覚的に<冷たい>という意味を表わし、同書ではまた官能的に<冷感>という意味でも使われている。

Goffredo Parise (1928-86) : 代表作に *Il prete bello* 『美男司祭』 1954, *Il padrone* 『御主人』 1965 (ヴィアレージョ文学賞), *Sillabario n. 1* 『シラバリー 1』 1972, *Sillabario n. 2* 『シラバリー 2』 1982 (ストレーガ文学賞) など。またコッリエーレ・デッラ・セーラ紙特派員としてジャーナリズムでも活躍、「ヴェトナム戦争従軍記」(1967- 76) や *Cara Cina* 『わが中国』 1966, などがある。

1 パリーゼ『雅冷やか』

マルコ・ポーロの『東方見聞録』を今我々が読んで最も強く印象づけられることの一つは、広大なユーラシア大陸各地の自然から人間、地理から歴史、産物から社会にいたるまでへのあくなき関心と正確な観察もさることながら、それらに対する著者の率直さ、公平さ、先入見のなさであろう。ありていに言えば、近代の西欧人による東洋論・日本論に露骨に、あるいは覆い難く顔を出す西欧中心主義のないことである。彼の書の中ではヨーロッパあるいはキリスト教世界は決して唯一絶対のモデルでも優越した社会でもない。比較対照の相手として持ち出されることもいくつかの例を除いてない。善きキリスト教徒としてその肩をもち、他宗教を悪しざまに言うことはあっても、それが偏見となって宗教以外の対象の観察や叙述にまで影響を及ぼすことはなく、常に新鮮で暖い眼が生きづいている¹⁾。また近代の偏狭な民族主義も、そこから生ずる白人至上主義もまだ形成されていない時代だった。²⁾

広大なアジアで次々と出会った自然、産物、珍しい事物、人々と町、そしてその社会をあるがまま見たまま聞いたままに、一人の人間としての感覚と知恵を頼りに素直に書き記そうとしたものであり、宗教的・人種的イデオロギーでもって頭から判定・断罪したり、私的な感情や本から得た判断をさしはさもうとはしていない。これこそが、彼がインパーソナル・ライターと呼ばれる所以であり、当時や後の時代の他の旅行記から区別される最大の特徴であり、今なお基本的文献

として生命を保たしめている科学性・近代性である。もちろん中世キリスト教世界という彼の生きた時代や社会の制約を逃れられるものではなかったし、様々な個人的限界はあったにしても、全体としては、彼の書の中では東洋は西洋を中心とする世界と知の体系の中に組み込まれていず、それ自体として存在している。これは、後にみるごとく、同時代人ダンテの場合と較べてあらゆる点で好対照をなす。

しかしそれは、マルコ・ポーロだけが持ちえた特権ではなかったろうか。十三世紀半ば、まだ各地の文明や社会が相対的に孤立した展開をとげていた時代に、十六歳にしてはや故郷を後にし、十七年におよぶ中国滞在を合せて二十六年の永きにわたって旅にあり、ユーラシア大陸すなわち当時の全世界を巡ったマルコにとっては、一歩を進めることがそのまま新しい発見であり、そこで見聞する物事をすべて疑いようもない事実として書き記すだけのことだった³⁾。これは未踏の地を旅して記す者だけが手にすることのできる特権ではなかろうか。マルコの悲劇もしかしたらそこにある。それらの物事は、彼自身にとってだけでなくヨーロッパ人すべてにとっても新しい事実、発見であったが、それが彼にとってはすべて疑うべくもない本当のことであったのとまったく同じ程に、当時のヨーロッパ人にとっては疑うべくもない偽りのことだったからである。これが、彼が「嘘つきマルコ」とあだ名され、その書が「空想冒険譚」の一種としてしか永く受け容れられなかった理由であり、晩年の不遇の原因であった。とまれかくして、『世界の記述』とも『世界の驚異』ともあるいは『百万』とも称されるこの書は、時代により社会により様々な評価を受けつつも、何よりも興味深い一つの、しかし最初にして最大の旅行記として、また世界の歴史の象徴的な記念碑として受け継がれてきたのだった。

さて二十世紀も末、そのマルコが七百年後によく足跡を印すことのできた日本において持ち続けようとするのも、かつてのあの率直で先入見のない眼と、イデオロギーや自民族中心主義に偏らない心である。「知ってのとおり、ヴェネツィアを発って数多の冒険と数奇な運命の末に中国にたどりついた彼のような旅行者にとって、第一にして常に最も有効な認識の道具たる感覚を通して、あらゆる物事を見聞しようと注意を集中した」。⁴⁾

しかし言うも愚ながら、その七百年の間に世界は大きく変わった。日本はもはや未踏の地ではないどころか、情報は相互にゆきわたっている。現代のマルコは、単に事実を書きとめるにとどまらず、イタリアやヨーロッパと比較対照して考察し、表面的な観察や印象から日本の社会、文化の奥深く分け入り、そこに隠れている本来的な姿を見極めようとせずにはすまされない。では、その眼に映った日

本と、心と頭で捉えられたその本当の姿はいかなるものだったか。

『東方見聞録』は一名『世界の驚異』とも呼ばれる。それは必ずしも著者マルコの意にそったものではないが、そこに語られている事実そのものが不思議で驚ろくべきことども、という意味で当時や後世の人々が付けた名前だった。しかし一面ではその名はまた、偏見やイデオロギーにとらわれず、常に生き生きとした驚嘆の眼で世界を観察し記述した著者の態度とその内容をもよく表していた。

「<政治>の国を発って、マルコは日本に着いた。飛行機はびたりと九時二十五分に着陸した。定刻どおりでマルコは驚嘆した」(p. 11)という書き出しに始まり、最後の日、「日本は彼にとって、この広い世界の中で喜んで帰化してもいい唯一の国と感じられた。もっと見るべきもの、もう一度見ておきたいものがまだまだたくさん残っていたからであり、驚きと幸福感は彼の瞳の中でまだそれほど大きかった」(p. 165)と結ぶまで、彼の日本旅行もまた発見と驚きの旅であり、この「新・東方見聞録」も同じ意味で「日本の驚異」と呼ばれ得るものとなっている。

では、何に驚いたのか。二十世紀も末、隅々まで探険され尽くした地球上には、ましてや工業先進国の一つ現代の日本には、かつてのマルコの特権はもはや残されていず、あるとすれば宇宙を旅する者にとってだけのはずである。ところがこのマルコは、日本はまさにその宇宙、「別の天体」だという。いかなる意味においてか、その旅と言い分を一応簡単にたどってみる。

新しい国、未知の地を初めて目にするときの期待と興奮は誰しも共通のものであろう。感覚の最もとぎすまされている瞬間であり、その第一印象は後々まで確かなものとして残る。

現代のマルコの最初の印象は、すでに空港に降り立った時から、そして初めて足を印す街の中にも何かしら「違った空気」がある、という感じだった。それは、超近代的な大都市東京の真中であるにもかかわらず何故か彼の心を落ち着かせるような一種の「静かさ」であり、出発にあたっての、「何千年にわたって盗み、ゆすり、人殺しの渦中にあった<政治>の国を後にしたいという願い」(p. 12)をみたしてくれるものであった。しかも彼は、この「病んだ心が癒されるような気持ち、脱出感」が、日本滞在の最後の日まで消え去ることなく残っているのを発見する。かくして彼の旅は、最初の瞬間から直感的に感じられたこの「異質な空気」、「異なるもの」が何であり、それが何故、どこから生じてくるのかを探求する旅となる。

現代のマルコが「違い」を感じるのは、かつてのマルコの時代のようにもはや物ではありえず、人でありその行為と精神である。顔・体つきや服装の違いではなく、直接人々から受ける感じ、日本人のかもしれない出づる雰囲気との

異質性であり、「人々の優しさと表情の変わらなさ」はその最たるものであった。また、街に残る珍しい和風建築や着物姿の女性や大使館の美事な日本庭園よりも、例えばその庭園で働く、最初の出会いのとき深々とお辞儀しただけであとは黙々と植木に向かう庭師の姿であり、通りがかりに街で見かけた、「まるで自分のものであるかのごとく一種の愛情をこめて仕事に打ち込んでいる」(p. 20)タイル職人の働きぶりであり、あるいは、替金に入った銀行で戯れにカレンダーの間違いを指摘したところ、「まるで日本全体の恥であるかのごとく顔を赤らめ、あわててすぐ直しに走り、何度もお辞儀して感謝した」(p. 15)女子行員の振舞いであって、自国の人々の態度とのあまりの違いに言葉もない体である。

どこがどう違うかは、イタリア人読者には説明するまでもないこと、要するに正反対でイタリアでは考えられもしないことだった。そして、日がたつにつれ、最初に感じたあの「違った空気」とはこうした人々の態度と人間関係から生まれてくるものであり、それがまたあの「静かさ」の源であることに気付いて、今自分が、「<政治>の国からだけでなく、心よりも物を信じる西欧の国々からも、物理的にも地理的にも極めて遠い国」(p. 14)に来ていることを改めて思い知らされる。

人々のこの態度、倫理性と並ぶもう一つの際だった印象は、家屋の外観や調度からありふれた物にまで、人々の服装から立ち居振舞いにまで、社会と生活のいたるところで生きづいて洗練された美意識であり、それを例えば、散歩の途中に立ち寄った寿司屋の店構えや内装、板前のいでたちや手つき、材料の味つけや器の並べ方などに見る。それは、川端や谷崎の文学、小津や黒沢の映画から抱いていたイメージとまさしく同じものだった。こうしたことから彼は、日本人の基本的な性格を「国民としての誇りと個人としての自尊心が……一つの同じものになったもの」(p. 33)と考え、それを、自己主張ばかりで国民としての誇りのかけらも持たず、「かけひきばかりに長じ、モラルを口にすることはあっても守ることはしない」(p. 32)政治の国、イタリアの対極に置く。したがって、この「倫理性」は「美意識」とともに日本人の貴重な精神的財産であり、その行動の中で常に一つになって作用しており、その点で「日本は常に不変だった。昔も今もこれからも変わることはないだろう」(p. 39)と確信する。

もっとも、現実の日本はそう美しいものばかりではない。途惑うこと、解せぬことも率直に遠慮なく書きとめ、時に皮肉や嫌悪感も隠さない。中でも大仰な形式主義、事大主義、また事が規則どおり予定どおり運ばなかったときの狼狽ぶりである。もっともそれらがあの倫理性や美意識と同じ根につながっていることはいうまでもない。

しかし、マルコにとっては何よりも理解し難くちぐはぐに感じられるのは、目の前の現実、視覚的な外観、すなわち超近代的な高層ビルやモルタル造りの家、

高速道路と自動車の洪水、洋風の商店やレストラン、人々の洋装とアメリカナイズされた女性の化粧といった西洋的なものであった。しかもそれらは、あの洗練された美意識や国民としての倫理感とおよそ相容れないと思われるにもかかわらず、圧倒的な形で社会の表面を覆っていた。日本はまるで二つの顔をもつかのようである。

この矛盾に対してマルコは次のように自答する：

日がたつにつれ、日本は二つに分かれるように見えてきた……。一つは巨大な西洋的な仮面、その建物や服装やほとんどあらゆる消費財であり、もう一つは、巨大でも圧倒的でも全然なく、むしろ色紙のように脆く薄い、本当の日本だった。これら二つはその顔を同時に見せることは決してなかった……。(p. 53)

では、その表面の新しい「西洋仮面」とその下にある古い「本当の日本」とはどのような関係にあるのか、「圧倒的に巨大な」前者の下で「脆く薄い」後者はいかにして押し潰されないで生き永らえているのか、つまり西洋の影響を受け外見はそれと分からぬまでに変ってしまったにもかかわらず、あのような国民性、高い倫理性や美意識がいつまでも変わらずに生活の中で今なお保たれているのは何故か。あるいは逆に、そうした「異質な精神」によっていかにして外見にせよ近代化は達成されえたのか。いわゆる「洋服を着た大和魂」の謎であり、これに対してマルコは、かつてのひそみにならって、地理や気候、人種や生物といった条件を持ち出し、日本人が肉体的にも文化的にも「純粋種」であること、つまり地理的・文化的に孤立して発展し、交配してこなかったことに求める。かくしていわゆる「西欧化」についても、それが「西欧化」であることを否定し、実は西欧の「日本化」なのだとみる。今日多くの人の眼に感染と映るもの、すなわち日本の国土における西欧的生活風俗も、西欧技術文化の変容もしくは完成、つまり＜日本化＞の一步に他ならず、その結果については世界中の知るところである(p. 33)、と。

目の前にある「日本と西欧」「伝統と近代」「精神と物質」の矛盾にこう決着をつけたマルコに残っているのは、その「隠れた本当の日本」を探し求め、より深く理解することだけである。そしてそこにより深く入り込めば入り込むほど日本はますます異質で西欧から遠く離れたものとして立ち現われて来、それだけますます魅力的なものともみえてくる。例えば、何げなく目にした道端の街路樹とそれを支える木杭の組み合わせ方、それをしばる棕櫚縄とその蝶結び、その全体に彼は見とれ、次のような感想を抱かずにはいられない。

マルコはそれを前にして、芸術作品を前にしたのと同じ感動を覚えた。……それは、芸術についてのマルコの認識を豊かにした。芸術作品とは唯一人の作者の手によらなければならないものでも、いかなる模倣も許さぬ固有のオリジナリティーを持たなければならないものでもなく、集団による無名のものでありえる事実を目を開いてくれたからだ。あの結び方にはもちろん作者、署名はなかったが、彼がもう一つの半球の学校で教わった限りからしても、スタイルの、すなわちオリジナリティーの極致だった。この時ほど日本が地球上の他のすべての国、とりわけ自分の国からかくも遠く思えたことはなかった。一つの島といわんよりは、蒼穹の沈黙と孤独の内に回転する一個の惑星に似ているように思えた。(p. 55)

美といえば、かつて世界各地の女性に観察を怠らなかつたマルコが日本女性の美を見逃すはずはない。それに、日本のエロティシズムは古くは浮世絵によって、新しくは小説や映画をつうじてヨーロッパでも夙に名高い。しかし、そこに描かれている官能性は、荒々しい動物的な欲情というものからはほど遠く、あまりにも優雅で人工的な匂いしか発散していないように思っていた。しかしマルコは実際に日本に来てみて、「胎生動物」的な西洋人に対して、人々の容貌に魚のような「卵生動物」の印象を受け、現実もそのイメージどおりのものであるのかもしれないと想像する。そしてある詩人の「雅冷やか」という言葉にそのイメージが、否「日本全体が要約されている」と感じる。

「雅冷やか」、つまり感覚の情念を欠くということだ。しかしそれでも全く魚だというわけではないのだから、多分どこかに雅と葛藤している情念が秘められているのだろう。そうしてすべては沈黙と暗闇の中で、着物の下か春画に描かれているような軽いゴムのような白くしなやかな肉のからまりの中で、すべてが起こるのだ。(pp. 77-78)

西欧の対極に置かれるのは、もちろんこうした官能性や美に対する姿勢だけではない。対決するものとしてではなく融和するものとしての自然観、絶対的な唯一神のキリスト教に対する相対主義的な汎神論的宗教観、伝達の道具としての西欧語に対する表現の手段としての日本語等々、日々の生活の中での観察や人々との触れ合いから得られるちょっとした手がかりからマルコは、あらゆるところに「異なるもの」を敏感に感じとり、「自なるもの」との違いを認識してゆく。

かくして、「すべてが日常的な現実かそれとも時を超越した精神かのどちらかのようなこの不思議な国」(p. 112)での、「冷やかな雅」をかもし出す「異なるも

の」を求めてのマルコの旅は、多くの場合前者の現実に期待を裏切られ、あるいはまたあらゆるところでかの「西洋仮面」に出会い邪魔されながらも、時に後者の「永遠なる精神」に触れる喜びの中で、京都や奈良、寺や神社、伝統産業や芸術、そして俳句や古武道や古典芸能の世界へと深まってゆくのだが、この小論の文脈にとってはこれ以上それをたどる必要はないであろう。

ごく単純に図式化していえば、マルコ・ポーロ以前は、その存在すら知られていなかった日本を含む大部分のアジアつまり東方は、ヨーロッパ人にとってさしずめ未知の世界かせいぜい妖怪変化の跋扈する異界であった。『東方見聞録』による紹介から十六世紀ポルトガル人の渡来までは、日本はコロンブスに代表される「発見」の対象となる。「発見」以後はキリスト教宣教師による「布教」の対象であり、「征服」の対象でもあったろうがその可能性はなかった。日本がそれを禁じ国を閉ざしてからは、一部の国にとっての細々とした「交易」の対象と変る。そしてより広範な「通商」の対象たることを求めて列強がその扉を破ってからは、すでに形成されていた西欧を中心とする近代国際体制の中に組み込まれてゆく。しかし、オリエントの最果ての国として常に「幻想」の対象であることには変わりなかった。

このように日本は、アジアを必要とし積極的に働きかける西欧に対して基本的に常に受け身で、より対象化されていたのに対して、西欧は日本にとって何らかの一定の対象であることはなかった。「西方」は浄土であり、天竺の彼方の西の果てが「幻想」の対象でも「恐怖」の対象でもなかったというのは、西欧にとっての「東方」と比べてみて興味深い。開国後相互の交流が始まってからは、当然ながらこうした単純な関係ではありえず、相互に対象化され、その時々の世界の情勢の中で複雑に変化してゆくのだが、両者の能動・受動の関係はどちらかといえれば逆転する。国を開いた日本の方がより西洋を必要とし積極的に働きかけ、したがって西洋はより対象化されるからである。そして双方にとっての相手のイメージも、この時点のこの方向性において基本的な性格が形成され固定化し、今にいたるまで一般的に変ることなく続くことになる。すなわち、日本にとって「文明開化」のモデルであり「追いつき」の対象であったヨーロッパやアメリカは、必然的に「近代」や「進歩」を象徴することになるのに対して、西洋にとって日本は、その装いを変える以前の日本、すなわち西洋の影響を受けぬ江戸時代までの「古い伝統的な日本」こそ「本当の日本」であり、それ以後の「新しい近代的な日本」は、自分の模倣であるがゆえに「偽りの日本」とされることになる。

したがって、日本人にとってヨーロッパのイメージが現在あるいは未来へと向かい、そこに常に「新しさ」が求められるのと反対に、ヨーロッパ人にとって日

本のイメージは過去へと向かい、そこに常に「古さ」が求められることになる。かくして西洋人が日本に接するとき、「古い本当の日本」に対しては驚嘆と賞讃を惜しまず、それが失われゆくことに哀惜の意を表する一方、「新しい偽りの日本」に対しては、文明の名のもとに師であるかのごとくその努力をねぎらい励まし、その成り行きを不安のうちに見守るか、あるいは猿真似として無視し、時に冷笑と軽蔑の色を隠さない、という共通のパターンが形成されることになる。それは、幕末開国時のオールコックやサトウ、明治のチェンバレン、ハーン、ロチ、新しくはベネディクトやライシャワーまでの日本論に共通してみられる基本的姿勢であるといつてよい。

では、パリーゼの『雅冷やか』もその例外ではなく、同じ種類の本をさらに一冊積み上げただけのことなのか。たしかに一般的図式においてはそうである。すでに見たごとく、この著者も日本を表面の巨大な西洋仮面とその下に隠れている本来の顔との二つに分け、後者こそ「本当の日本」だとはっきり言い、前者には何の興味も示さない。西欧対日本、新旧の二分法、伝統と近代、物質文明対精神文明、美意識と倫理感、完璧主義と形式主義、謎の微笑とお辞儀、「冷やかな雅」と形容される官能性、西洋の個人主義対日本人の和、双方の自然観・宗教観の違い等々、東西の比較や日本社会・文化についての観察と分析はどれをとっても何ら目新しいものではなく、そのイメージもありきたりなものばかりである。また彼が訪ねた人や場所も決して特別なものではなく、分け入ろうとした世界、すなわち俳句・禅・武道・能・音楽等々も、そこから導かれる結論、「無と永遠性」もこれまたありきたりのものであり、そもそもその理解がどれほどの深みに達したのかさえおぼつかない。その意味では、多くの旅がそうであるように彼の旅も映画や小説・絵画や書物を通じて抱いていた既成のイメージと知識の追認と増幅の旅であり、「異国情緒」の域を出ないものであったかもしれない。⁵⁾

ここではしかし、そうした印象や日本論の当否、日本理解の深淺が問題なのではない。その印象や解釈があまりにも一方的・固定的で、日本は夢とお伽の国のように美化されていること、また彼の接した日本が極めて部分的・一面的で、科学技術や経済など今日本が世界で最も注目をあびている側面、あるいはその否定面その他多くの重要な現実がとり上げられていないことも問題ではない。また、著者は日本文化の専門家でも研究者でもなく、この書はその学問的考察や分析でも、バランスのとれた要領のいい概説・紹介でもない。

これは、日本については一般的なイメージと知識以上にはもっていなかった現代の一イタリア人作家による短い期間での日本との出会いの物語であり、その、特別の用意もないいわばぶっつけの出会いの中で著者は、自分の住み慣れた世界にはない異質な空気をかぎとり、その違いの原因を求めて別の世界に迷い込む、

迷い込み魅惑されたその世界、それを著者は「本当の日本」と呼ぶ、いわばそれだけの話である。もし彼の日本があまりにも偏っており美化されていると映るならば、それはその出会いがそれほど印象的であり、その一面こそが彼にとってまごうことなき「日本」だったということであろう。

したがって我々にとって問題なのは、この著者が日本を西欧あるいは少なくともイタリアの対極、あるいは「別の天体」と位置つけるときのその位置づけ方と背景である。つまり、すでにみたような日本についての印象や観念、それらはほとんどすべての外国人の観察や分析に共通するものであるが、それがいかに組み合わせられているか、今様の言い方をすれば、それら個々の印象と観念を項目とする日本のイメージのパラダイムの変換が起こっているか、上記項目間の組み替えが生じているか否かであり、それが「ジパングの系譜」の上でいかなる位置を占めるかである。

二十世紀も末、ヨーロッパにおける日本のイメージはもはやかつてのサムライや浮世絵に代表される「古い伝統的な日本」だけではない。そこにオートバイやカメラからハイテクまで、かの地にもあふれる工業製品に代表される科学技術先進国、世界第二の経済大国というもう一つの神話、「新しい」イメージが加わる。しかもその「新しい日本」は、西欧の後を追うかつての日本ではなく、科学技術と工業というまさに近代西欧を築き上げてきた文明において追いつき追い抜く超近代的な日本である。その事実は、日本を伝統を捨てて近代化に励む国、圧倒的な近代化=西欧化すなわち西力東漸の前に必死に抵抗する国、あるいはせいぜい伝統と近代の調和をはかろうとする国、という西欧をモデルとした進歩の歴史と論理の図式ではもはやとらえられないことを意味する。世界史のこの新しい状況にあたっては、少なくともかつての西洋人の「新しい日本」に対する姿勢、師としての励ましも模倣者に対する冷笑も、現実には根強く残りはしても、もはや意味をなさない。それは同時に、「古い日本」に対するかつての姿勢、近代という名のもとでの優越感を前提とした、古く遅れているが故に珍重し賞でるあの異国趣味はその基盤を問われ揺るがされることを意味する。

では、「古い日本」とこの「新しい日本」はいかに捉え直されるべきなのか、様々な現実をこの二つの項目で代表さすならば、その二つはいかに組み合わせられ、その組み合わせはかつてのものといかに違ってくるのか。最近の日本への関心や日本に関する多くの著述がこうした新しい状況から生まれてきたものであることは言うまでもない。パリーゼのこの『雅冷やか』もそうした一つであり、彼もまた現代の日本を目の前にしてこの問題と対面せずにはおられなかった。ヨーロッパの知識人・教養人として「古い日本」のイメージをもってやって来たマルコは、そこに生きる人々と触れ合い観察する中で、その「古い日本」が過去の遺物とし

て亡くなりつつあるどころか、表面を覆う「新しい日本」の下で今なお生命を保ち、人々の日常の生活の行動原理としてたくましい力を発揮し続けていることを発見して驚ろき、かくして日本は「古くして新しい永遠に変わらぬ国」としてたち現われてきたことはすでに見た。

しかしこの捉え方は直ちに両刃の刃となって自らに、すなわち西欧文明に向かわずにはおかない。つまり「古い日本」＝「新しい日本」という等式は、「西欧」と「日本」の関係を問い直さずにはおかない。何故なら、かくおくことによって「日本」は、近代の時間軸上でもはや「西欧」の後ろに位置するのではなく、同じ点上に位置することになるからである。しかしそれは、日本を今なお「古い日本」とするかぎり不可能なことである。かといってまだこの二つをうまく位置づける新しい時間軸は考え出されていない。とすると残るのは、その時間軸そのものを疑うか、あるいは別の座標軸を考え出すことである。そしてその解決法の一つが再び文化相対主義的な空間軸を持ち出し、西欧の対極に日本を置くことだった。かくして「古い日本」は「新しい」意味を獲得し、文明的優越感を背景としたかつての「異国趣味」はもはやその根拠を失い、「古くして新しい日本」は真剣な探求の対象となる。

パリーゼの『雅冷やか』において採られた図式もまたそれである。例えば象徴的な例が、街路樹の支えの蝶結びといういはぼどうでもいいこと、イタリアでなら一瞥さえくれられぬものに無名の芸術性と自然に対する心遣いを感じ取り、それが西欧の論理と倫理、個人主義に基づく芸術観と征服の対象としての自然観からおおよそ想像しえぬものだけに、日本を対極どころか地球の「彼方」にまで押しやらずにはおれなかった。かつては、否今も、前近代的と批判され遅滞の象徴とされた個人主義のなさや自然からの離脱のなさが、ここでは驚嘆の的となり新たな意味をおびることになる。

前にも少しふれたが、マルコ・ポーロの書が一名『世界の驚異』とも称されたのは何故だったか、何が驚くべきことどもだったのか。彼が旅したどこにも妖怪変化は棲んでいなかった。世界は古代や中世のヨーロッパで言い伝えられ想像されていたようなものとはおおよそ違い、その人間・自然・産物・風俗に豊かな多様性を見せながらも、結局のところヨーロッパとは変るものではなかった、否むしろ、文明と富と自然において中国やインドは比べものにならないほど豊かだった。マルコが、一つ話が終わるたびに自分の語ったことを信じてくれるよう断らなければならなかったのもそのためである。だから、まるで読者に謝まり気嫌を取るがごとく、自分が足跡を印さなかった土地に申し訳のように怪獣や魔物を棲まわせ、滑稽で恥ずべき風習を押しつけざるをえなかった。自分がたどり着いたユーラシア大陸の果て中国の、さらに東の海上にある未知の島ジパングを黄金国に仕

立て上げたのもまさにその同じ理由からである。

かくしてジパングは、マルコの旅によってほとんど閉じかけた世界に取り残された一つの、しかし最も魅惑的な隙間として残り、その後コロンブスを始めとする航海者たちによる「発見」や、ついには日本そのものの「発見」等によって全世界が決定的に閉じられた後も、ヨーロッパにとってのかつての「東方」の役割を象徴的に担わされ、いつまでも「幻想」の対象であり続ける。

かつて見残し七百年後にようやくたどり着いた日本は、このように現代のマルコにとっても、黄金でこそできてはいなかったがそれ以上に驚くべき「夢と謎の国」であった。かくして日本は、マルコ自身の手によって再び世界の「彼方」に押しやられ、新たな「幻想」の対象として今なお発見さるべき「ジパング」であり続けることになるのである。

- 1) 同書には写本・異本が多いが、編者による異同はこの点に関する興味深い問題を提供する（例えば聖職者ピピヌスによるラテン語版）。後世の同書の剽窃も同様である（例えばマンデヴィル『東方旅行記』）。
- 2) 1254年生 1324年没、東行は1270～95年、中国滞在は1275～90/91年。
- 3) G. Parise, *L'eleganza è frigida*, p. 14. 以下引用頁は本文中に記す。短い語句の引用については省略する。
- 4) 主なインタビューの相手は、川端康成未亡人、作家石川淳、ゾルゲの日本人妻ミアア(もしくはイシイ)・ハナコ、高野山管長、日商会頭永野重雄、共産党文化部長ニシザワ・シュウイチ、ホンダ会長本田宗一郎等。訪問地は東京と京都が中心。
- 5) 各章の扉に色刷りで掲げられている浮世絵やふんだんに挿入されている写真はすべて、江戸・明治の古い風俗を写したもの。しかしこれは多分に出版という商業目的のためであろう。また先人の日本に関する書物を読んだ跡が明らかにうかがえる、例えばブライス、ベネディクト、クローデル、ヘリゲル、バルト等。



図1 パリーゼ (右)・モラーヴィア (左)

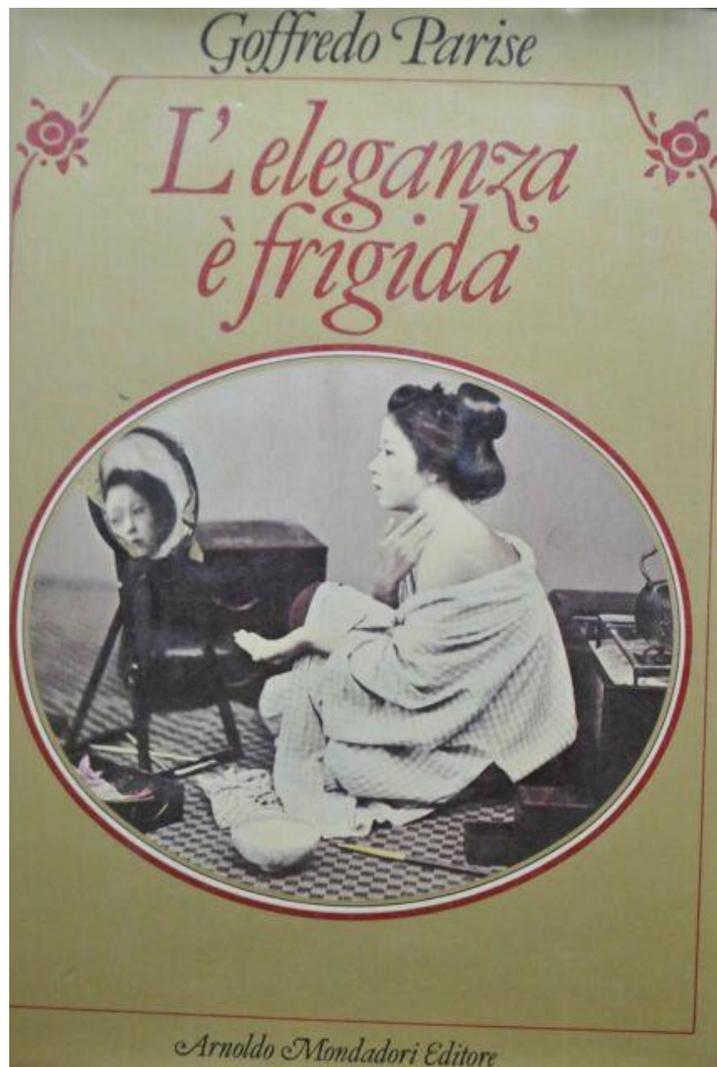


図2 G. Parise, *L'eleganza è frigida*, Mondadori 1982 (初版表紙)